「竹之下宿」と「竹之下」

静岡おやま案内人　四季の旅人

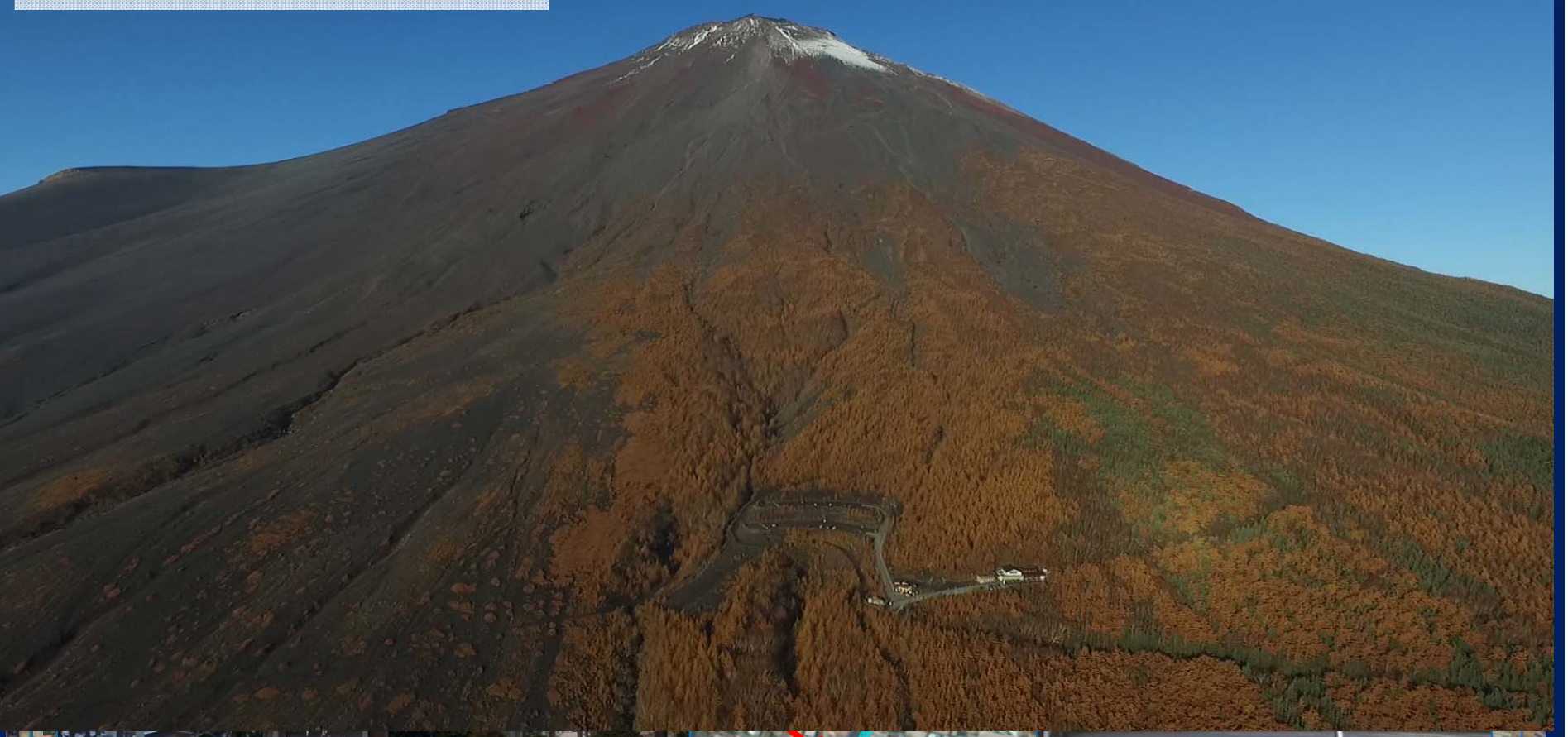
四季の旅人紹介

・小山町内の名所旧跡やハイキングの案内、観光協会のイベント支援を行っている

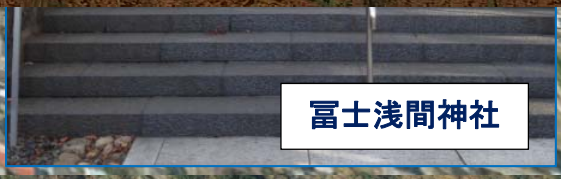
・会員数28名（男性6名、女性22名）

県民の日イベント　シャクナゲプロムナード参加者と共に

富士山須走口五合目の紅葉

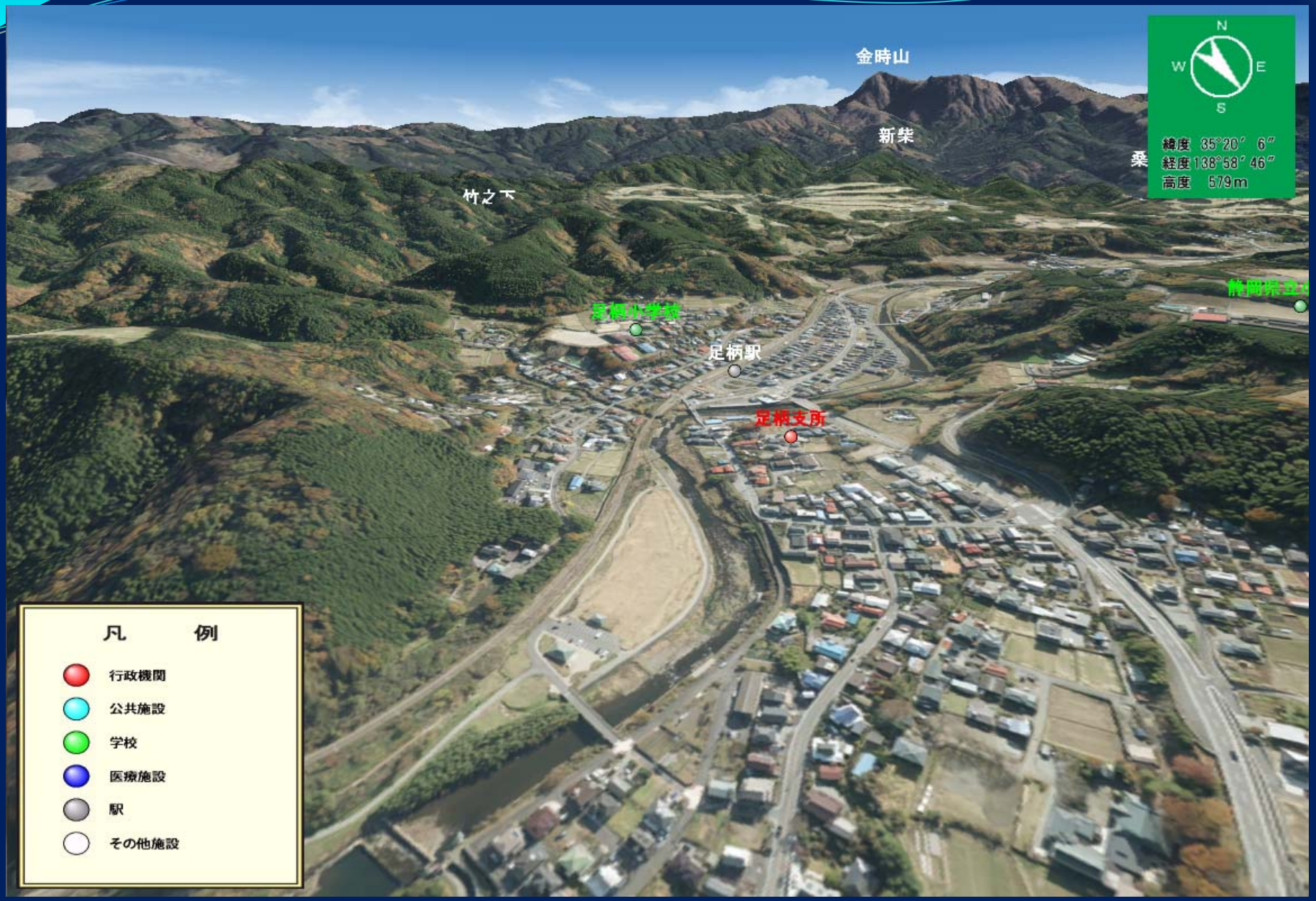


伊奈神社

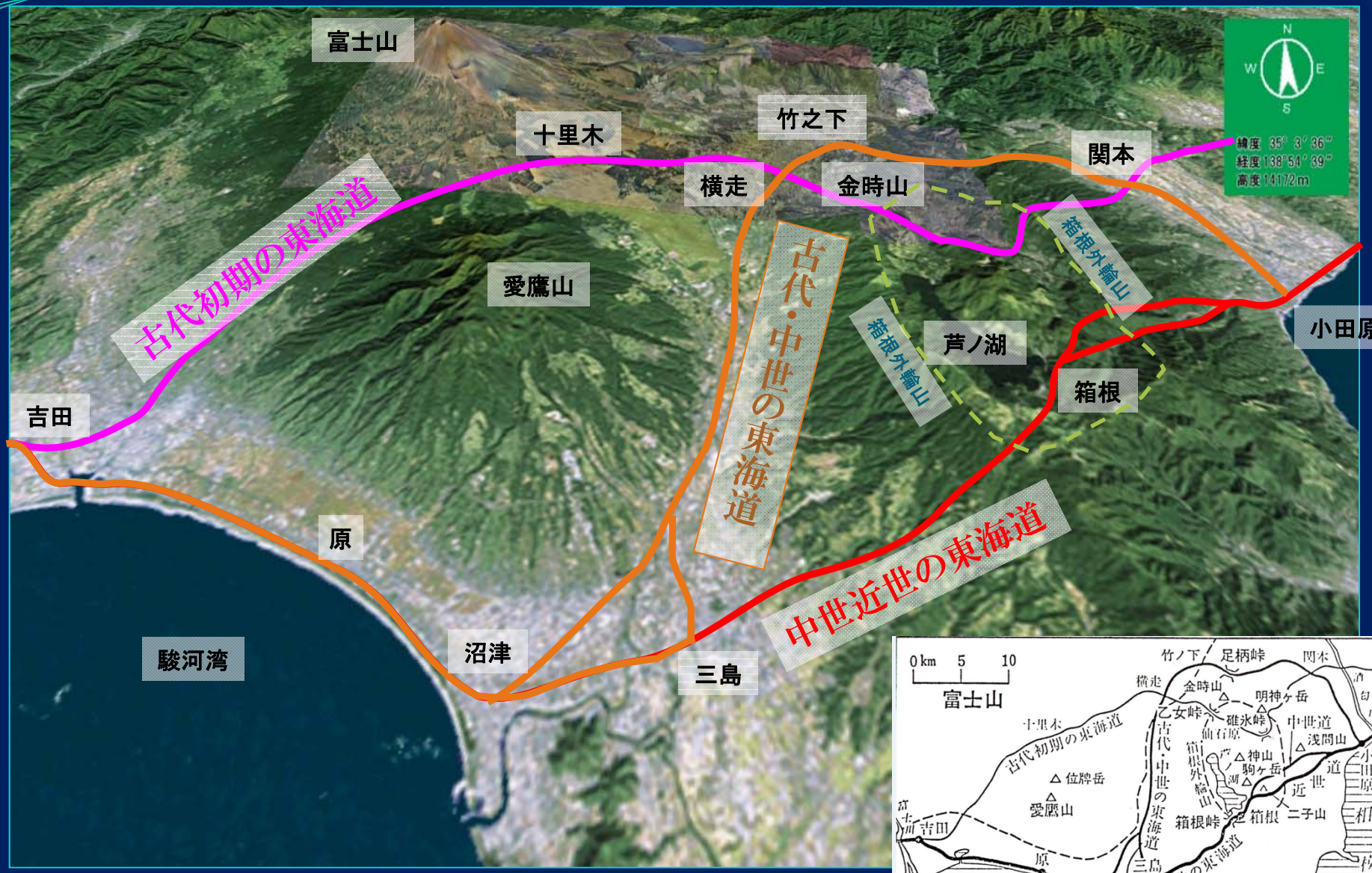


富士浅間神社

史実と伝説・伝承に彩られた竹之下地区



古代・中世・近世の富士箱根道



鎌倉往還地図（足柄～御殿場）

現在の地形に合わせてみると

足柄街道、鎌倉往還は、相模・伊豆・甲斐の国への物資荷継場、塩の道、情報交換の要衝として、役割を果たしてきた。

図１　鎌倉往還①

足柄峠でのドラマ

・聖天堂には空海揮毫の「足柄山」の扁額が掲げてあった。
（現在は宝鏡寺に寺宝として収蔵）

金太郎伝説（爪切り地蔵）

・金太郎の母、八重桐が目を患い、箱根の姥子の湯で全快。その感謝の気持ちで金太郎が爪で石に、お地蔵様の顔を彫った。

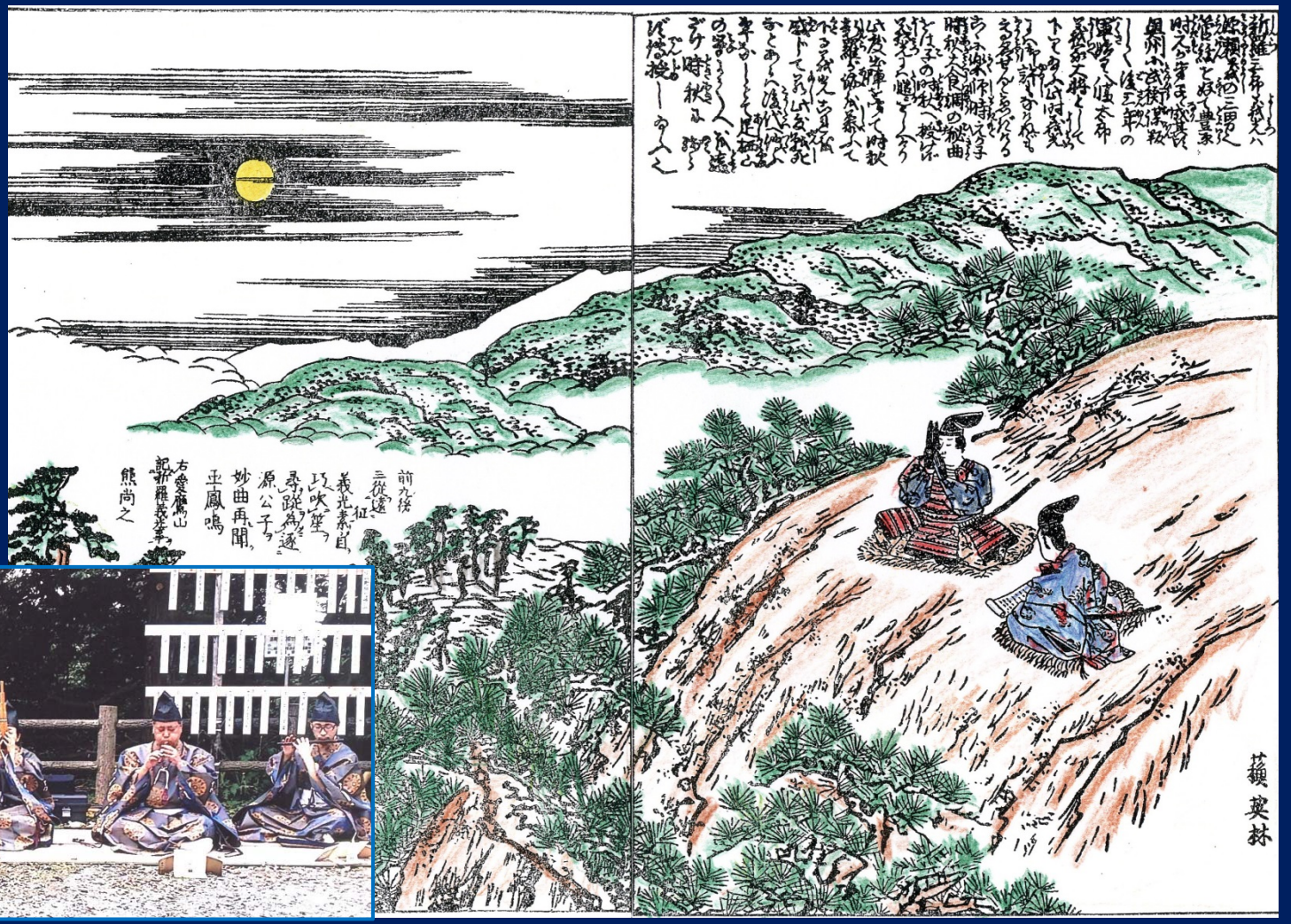
金太郎伝説（頼光対面の滝；不動の滝）

・源頼光は、足柄峠で赤い雲のたなびく峰を見て「あの雲の下には偉人がいるにちがいない」渡辺綱にみてくるよう命じた。

・渡辺綱は金太郎親子に頼光の意を告げ、この滝で初めて金太郎は頼光と対面した。

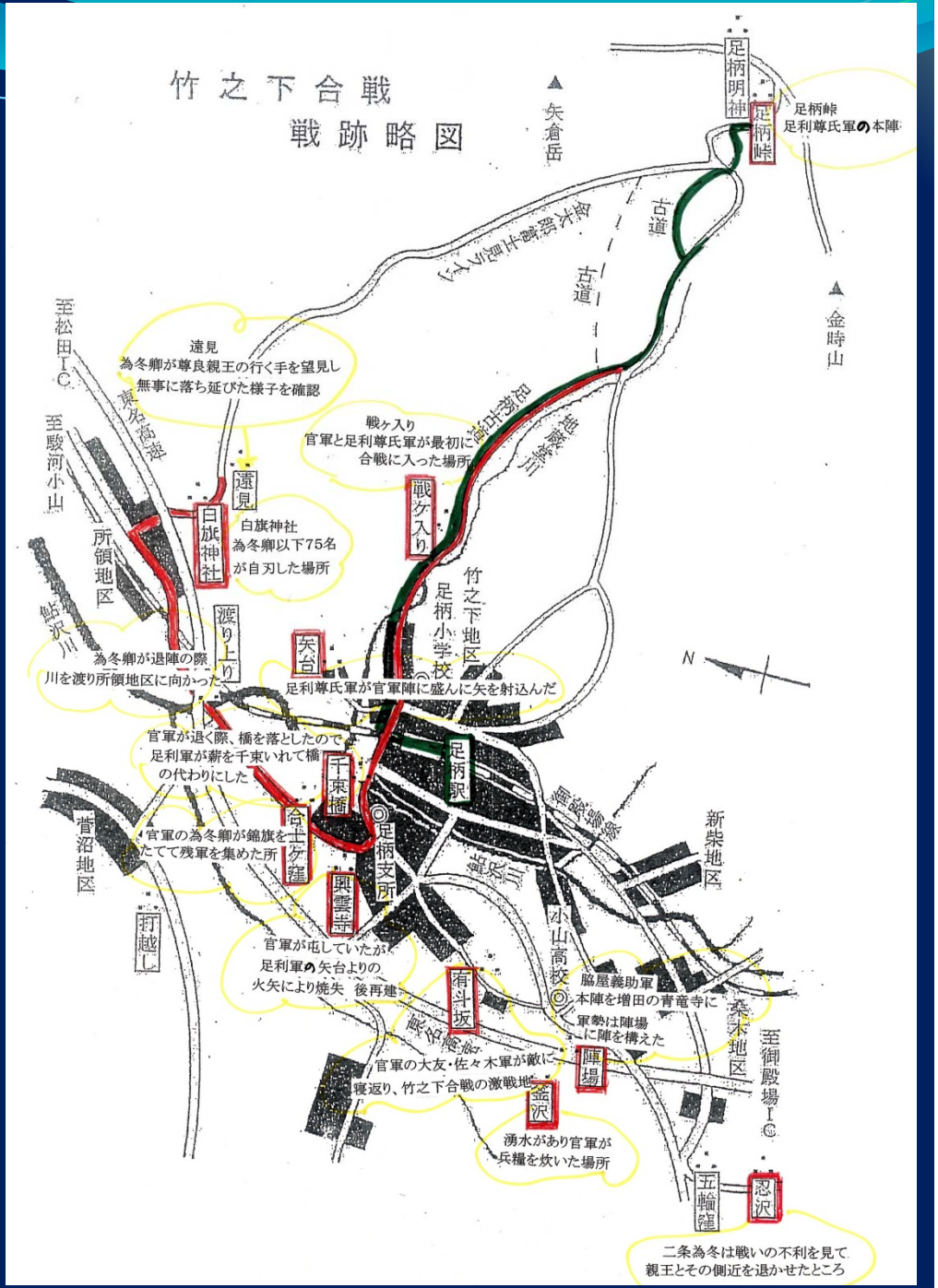
足柄笛吹き伝説

・今から約930年前、後三年の役の時兄、八幡太郎義家が苦戦と聞き、弟新羅三郎義光は援軍を率い奥羽へ向かう途中、足柄峠で師匠から伝えられていた笙の奥義を、師匠の息子豊原時秋に伝授した場所。



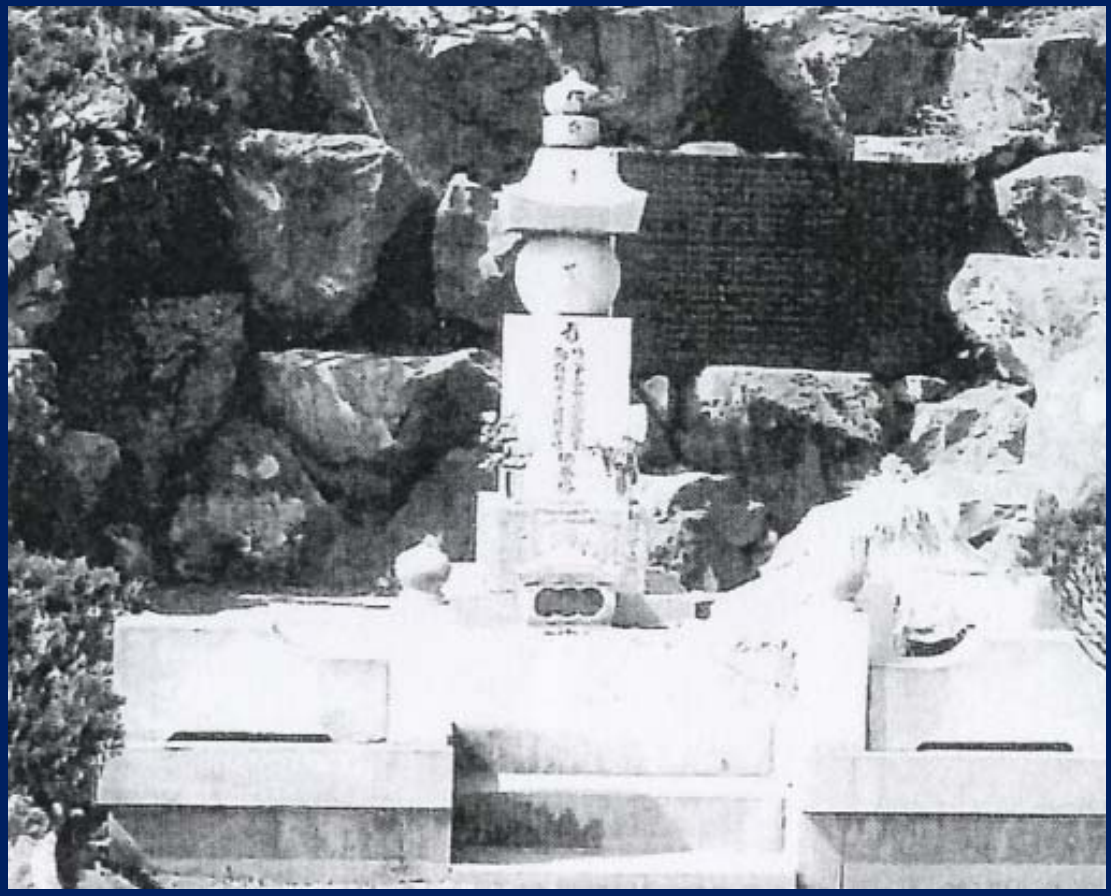
竹之下合戦の戦跡略図

・戦返り線で戦いの火ぶたが切られ、有闘坂で味方の裏切りにあって敗れた新田義貞軍は、尊良親王を無事に逃れさせ、側近二条為冬卿以下75名が自刃した。



竹之下古戦場の碑と興雲寺

・竹之下古戦場の碑は戦乱の悲惨さを思い、不戦の誓いを立てた区民により建立。興雲寺は竹之下合戦の折尊良親王新田義貞軍・脇屋義助が布陣した。



和泉式部の誕生石（百人一首と石碑）

“あらざらん　この世のほかの思い出に
今ひとたびの逢うこともがな“

百人一種でおなじみの情熱の歌人、和泉式部の誕生石がある。

花戸橋付近

・馬伏川と鮎沢川の合流地点にお材木場があり、各地で集められた木材を筏に組んで小山村落合まで流していた。

・この場所では鵜飼も行われていた。

鵜飼の方法

・鵜飼のシーズンは5月～9月まで。川奉行衆が訪れて実施されていたが、所領村や近隣の村人にとっては通常の年貢や賦役に加えての大きな負担だった。

繋ぎ鵜・・・手縄を使用

夜　魚・・・夜間に松明をつけて行う

様々な負担（1680年）

人足・・・・24～25人（竹之下所領は当時20軒）5か月で80人位

人足に出る人は薪・野菜・縄・アユ箱・岡持・杉根を持参しなければならなかった

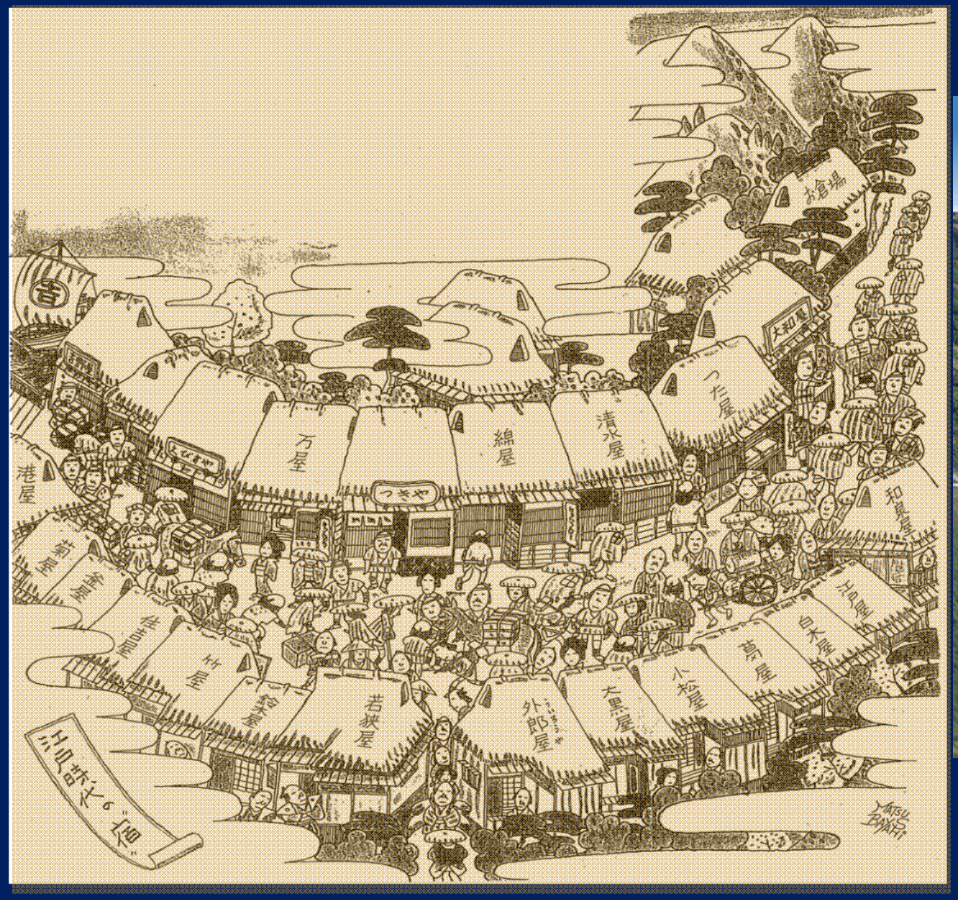
1697年酒匂川を駿河の国御厨迄、川船で通行する願書でる。

鵜飼の鮎を小田原藩に献上したが、1721年には実施されていない。

1704年宝永噴火で川に砂が溜まり鵜飼が出来なかった為と思われる。

宿場町「宿」と「向方」

・竹之下宿は「宿」と「向方」、2つの宿場があり、宿には30軒以上の宿屋があった。名主、お倉場、薬屋、馬喰うの取締、富士講や伊勢参りの宿、駄賃つけ、酒屋、神社の鍵取り、川関係の宿等で1つの集落をなしていた。



江戸時代の「宿」の町なみ

現在の竹之下地区(手前が「宿」、奥が「向方」)

宿場町「宿」と「向方」

- 「宿」と「向方」、2つの宿場の屋号と職業

江戸末期から明治初期　竹之下宿の様子

	昔の屋号	職　業	仕事の内容
1	和泉屋	宿　屋	富士講の人たちが多く宿泊 明治の中ごろまで営業
2	江戸屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋 豆腐屋
3	白木屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
4	葛　屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
5	小松屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
6	大黒屋	荷物問屋	
7	外郎屋	薬　屋	ういろうを売っていた 屋号はささや
8	若狭屋	名　主	お倉場の管理
9	鈴木屋	宿　屋	富士講の人たちの宿
10	竹　屋	宿　屋	富士講の人たちの宿
11	住吉屋	雑貨屋	
12	釜　屋	休憩所酒屋	鮎沢川の変化によって引越
13	菊　屋	宿　屋	鮎沢川の変化によって引越
14	港　屋	川の港	荷物扱い所
15	吉野屋	馬　宿	馬宿だった
16	えびす屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋 富士講の人たちの宿
17	万　屋	宿　屋	宿の中でも特に上宿だった 木食上人も宿泊
18	つきや	搗屋精米屋	鮎沢川沿いで搗屋を行っていた 川の変化により引越
19	綿　屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
20	清水屋	搗屋精米屋	
21	つた屋	宿屋　酒屋	富士講の人たちの宿
22	大和屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋 御厨地方の馬喰の取り締
23	お倉場	名　主	若狭屋で管理した上納米を集積していた所

江戸末期から明治初期　竹之下向方の様子

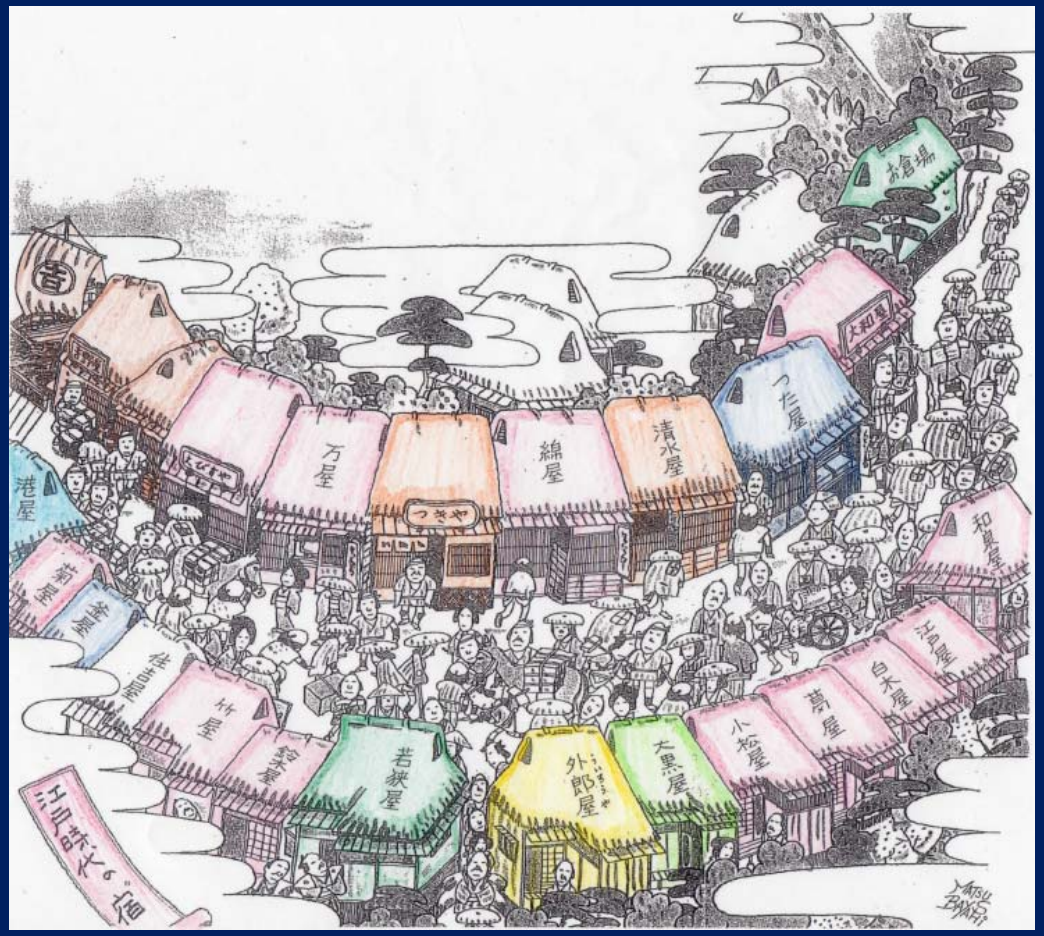
	昔の屋号	職　業	仕事の内容
1	伊勢屋	宿　屋	伊勢参りの人たちが多く宿泊
2	鍵　屋		竹之下神社の鍵取り
3	日の出屋	豆腐屋	
4	富士見屋	宿屋　酒屋	駄賃つけの休憩所
5	熊野屋	宿　屋	若狭屋の分かれ　熊野神社鍵取り
6	岩田屋	宿　屋	駄賃つけ宿屋　宝鏡寺裏に住んでいたが１７０年前に引っ越した
7	丸　屋		
8	そび屋	宿　屋	運送屋の宿屋
9	神　田		
10	煙硝屋	煙硝作業	火薬の仕事 小料理屋
11	山吉屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
12	かじや		
13	橋本屋	宿屋と商人	
14	甲州屋	宿屋と商人	
15	中の屋	農　業	
16	富士屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
17	かめ屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
18	足袋屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
19	車　屋		水車で精米
20	上　宿	農　業	駄賃つけ兼宿屋 御厨地方の馬喰の取り締
21	げんぞうさん		一番古い家（７軒の内の一軒）
22	上の山	農　業	駄賃つけ兼宿屋 御厨地方の馬喰の取り締
23	こく屋		

宿場町「宿」と「向方」

- 「宿」地区の屋号と職業（業種ごとに色分け）

江戸末期から明治初期　竹之下宿の様子

	昔の屋号	職　業	仕事の内容
1	和泉屋	宿　屋	富士講の人たちが多く宿泊 明治の中ごろまで営業
2	江戸屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋 豆腐屋
3	白木屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
4	葛　屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
5	小松屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
6	大黒屋	荷物問屋	
7	外郎屋	薬　屋	ういろうを売っていた 屋号はささや
8	若狭屋	名　主	お倉場の管理
9	鈴木屋	宿　屋	富士講の人たちの宿
10	竹　屋	宿　屋	富士講の人たちの宿
11	住吉屋	雑貨屋	
12	釜　屋	休憩所酒屋	鮎沢川の変化によって引越
13	菊　屋	宿　屋	鮎沢川の変化によって引越
14	港　屋	川の港	荷物扱い所
15	吉野屋	馬　宿	馬宿だった
16	えびす屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋 富士講の人たちの宿
17	万　屋	宿　屋	宿の中でも特に上宿だった 木食上人も宿泊
18	つきや	搗屋精米屋	鮎沢川沿いで搗屋を行っていた 川の変化により引越
19	綿　屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋
20	清水屋	搗屋精米屋	
21	つた屋	宿屋　酒屋	富士講の人たちの宿
22	大和屋	宿　屋	駄賃つけ兼宿屋 御厨地方の馬喰の取り締
23	お倉場	名　主	若狭屋で管理した上納米を集積していた所



竹之下宿の宿泊者（有名人）

- 1060年　菅原孝標の女「更級日記」に記す
- 1190年12.27　源頼朝　右大臣に就任後京都から帰途
- 1223年4.15　海道記の作者（鴨長明か源光行）
- 1238年10.27　4代将軍　藤原頼経　上洛の帰途
- 鎌倉執権　第6代　平長時（北条長時）

竹之下孫八左衛門と常唱院

・竹之下孫八左衛門（大森頼忠）は源頼朝に仕え、居城は竹之下屋敷、城の腰と呼ばれた。ここに常唱院があった。

・江戸城西の丸御殿、中央休憩の間の襖絵には常唱院の桜と竹之下の風景が描かれている。由緒ある寺院だった。

木食上人　万屋へ泊まった時の掛け軸

・木食上人（1717～1810）

・木の実を取って食べ、修行して不思議な力を発揮して自然災害や貧困、疫病等から守る為、伊勢原や西湘地区、御殿場、小山一帯の人々を教え導いた。

・宿でも上宿の万屋へ宿泊し直筆の掛け軸を残した。

長谷川角行と足柄太鼓

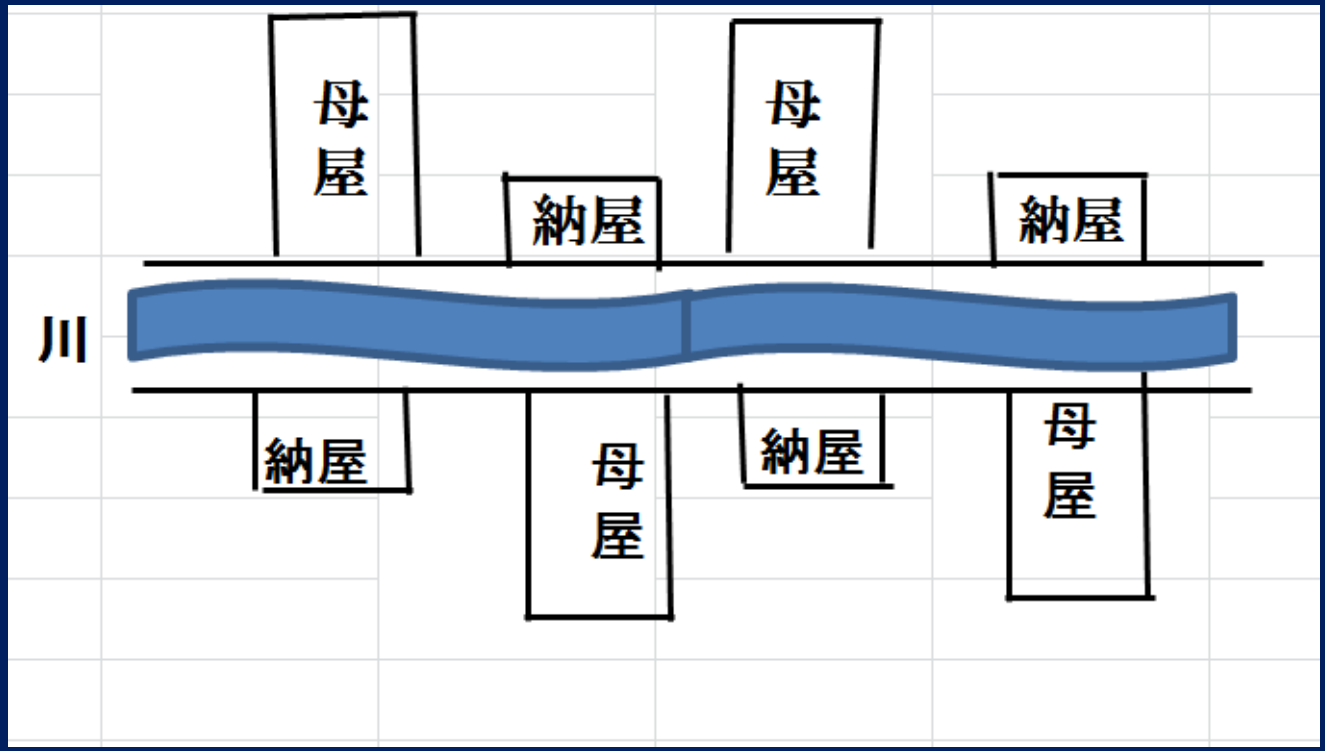
・角行は富士登山者の祈祷を行う為、しばしば竹之下を訪れた。その際竹之下太鼓を伝えた。

・これは北駿に伝わる太鼓の源流。現代的な躍動感溢れる太鼓ではないが、安全や豊穣を祈る祈りの太鼓である。

宿場の知恵

・度々火災に見舞われた宿場は、ウナギの寝床の様に間口の狭い奥行のある家並みにし、火災の類焼を防いだ。

・火災時の母屋への類焼を防ぐため、どの家も母屋と納屋は川を挟んで成り立っていた。



足柄峠・宿を舞台に詠まれた詩

・峠は出会いと別れの場。全国に数知れず峠はあるが足柄峠、竹之下、箱根を詠んだ歌が一番多く500年で4500首詠まれている。

鎌倉第6代執権、北条長時の歌は足柄駅に歌碑

“あしがらの　山のふもとにゆきくれて
一夜宿かる竹之下道”

阿仏尼　いざよい日記

“ゆかしさよ　そなたの雲をそば立てて
よそになしぬる足柄の山”

北条氏康

“雪折れの　竹之下道踏み分けて
なくなる跡を代々に知らせむ”

足柄峠・宿を舞台に詠まれた詩

足柄で歌われた歌（宿）テーマ

崇尊親王(後醍醐天皇の親王)
竹の下しばらく立ちよるほどだに　うき伏しげき世をいかにせん
平　長時
あしがらの山のふもとにゆきくれて　一夜やどかる竹の下みち
生田蝶介（歌人　吾妹の主幹）
鮎沢の瀬音は笙にまがふらん　秋雲は凝るあしがら岳に
佐々木信綱（歌人）
日本武尊の命吾妻こひたたしし峯という雲　いかかれり
半田良平（歌人）
今日われらが越えし峠を峻しみと　いにしえ人はかきのこしけり
藤原実氏（鎌倉時代）
手向けして心ゆるすな足柄の　関の山こえ荒きその道
柿本人麻呂
足柄のみさかを越えん玉くしげ　箱根の山のあけぬこの夜は
足柄の御坂につかん玉くしげ　箱根の山のあけんあしたに
藤原光俊（続古今和歌集）
秋までは不二の高根に見し雪を　分けてぞ越ゆる足柄の関
飛鳥井雅経（新古今和歌集の選者）
足柄の山の関守いにしえは　有りもやしけん跡だにもなし
とまるべき関屋はうちもあらわにて　嵐ははげしあしがらの山
宗尊親王（御嵯峨帝皇子）
竹の下しばし立寄程だにも憂節繋き　世を如何にせん
北条氏康
雪おれの竹の下道ふみわけて　なくなる跡を代々にしらせむ
鴨長明（海道記の作　）竹の下に泊まった際に詠んだ
見し人にあう世の夢のなごりかな　かげろう月に松風の声
更る夜のあらしの枕ふしわびぬ　夢もみやこにとおざかりきて
あしがらの関吹きこゆる秋風の　やどり知らる竹の下道
大江公資（相模国司）
煙たつふじの高根に降る雪は　思いの外にきえずぞありける
くやしさもわすれやせむ足柄の　関のつらさをいつになりなむ

相模にはありともいはず富士の山　けぶりも浪も何かくらむ
何処とも思いぞわかぬ富士の山　みを離れたるけぶりならねば
ゆきかいの道のしるべにあらましを　隔てけるかな足柄の関
為相卿（参議）
風そよぐ竹之下露袖に落ちて　しかの音寒き　足柄の山
あしがらの山道のあらし夜を寒み　しかの音もろき竹の下道
風雅　前中納言為相女
あしがらの山道の嵐の跡とめて　花の雪ふむ竹の下道
風雅　藤原頼成
深き夜に関の戸出でて足柄の　山本くらき竹下の道
為相（前中納言）
山ふかき杉のしけみを吹きおちて　ふもとによわる竹の下風
頓阿（1315年）連歌
みねたかき　あしがら越ゆる　あしもとに
万葉集　満誓
とぶさたて足柄山に舟木切り　木に切りゆきつあたら舟木を
続古今集　家隆
ただ暮れぬ関の戸ささぬ頃なれば　月にも越えん足柄の山
続古今和歌集　藤原光俊
秋まではふじの高ねに見し雪を　分けてぞこゆる足柄の関
阿仏尼　いざよい日記
ゆかしさよそなたの雲をそばたてて　よそになしぬる足柄の山
新拾遺和歌集　卜部兼直
しぐれつる雲を外山に分け捨てて　雪に越え行く足柄の関
新拾遺和歌集　祝部成茂
あしがらの山路の月に峰越えて　あくれば袖に霜ぞ残れる
海道記の作者
秋なればいかに木の葉の乱れまし　あらしぞおつる足柄の山
作者不詳
足柄の箱根飛び越え行く鶴の　ともしき見れば大和し念ほゆ
藤原部等母麿
足柄の御坂に立ちて袖振らば　家なる妹は情に見もかも

作者不詳
足柄の安伎奈の山に引く船の　後引かしもよ幾許来難に
作者不詳
足柄のわをかけ山のかづの木の　吾をかづきねかづきかずとも
作者不詳
足柄の八重山越えていましなば　誰をか君と見つつ思はん
作者不詳
足柄の箱根の山に粟まきて　実とはなれるを逢はなくもあやし
妻木　源　仲正
いかにせんすくにはゆかで足柄や　横走りする人の心は
妻木　慶融
玉くしげ　はこねの山の峰ふかく　水海はれてすめる月かな
新後撰　従三位資基
旅衣しぐれてとまる夕暮に　なお雲こゆる足柄の山
玉葉　為家
岩がねをつたふがけじの高ければ　雲のあとふむ足柄の山
新勅撰　後京極摂政良経卿
足柄の関越え行くしののめに　一むらかすむ浮島がはら
寂蓮集　寂蓮法師
旅の空雲ふむみねを越え行けば　しぐれは神の下よりぞある

昔を今に伝えること（姑から嫁へ）

・竹之下地区では、現在でも屋号が使われている。電話帳は、鈴木、稲、岩田のオンパレード。屋号で呼び合う方が早くて誤りも無い。

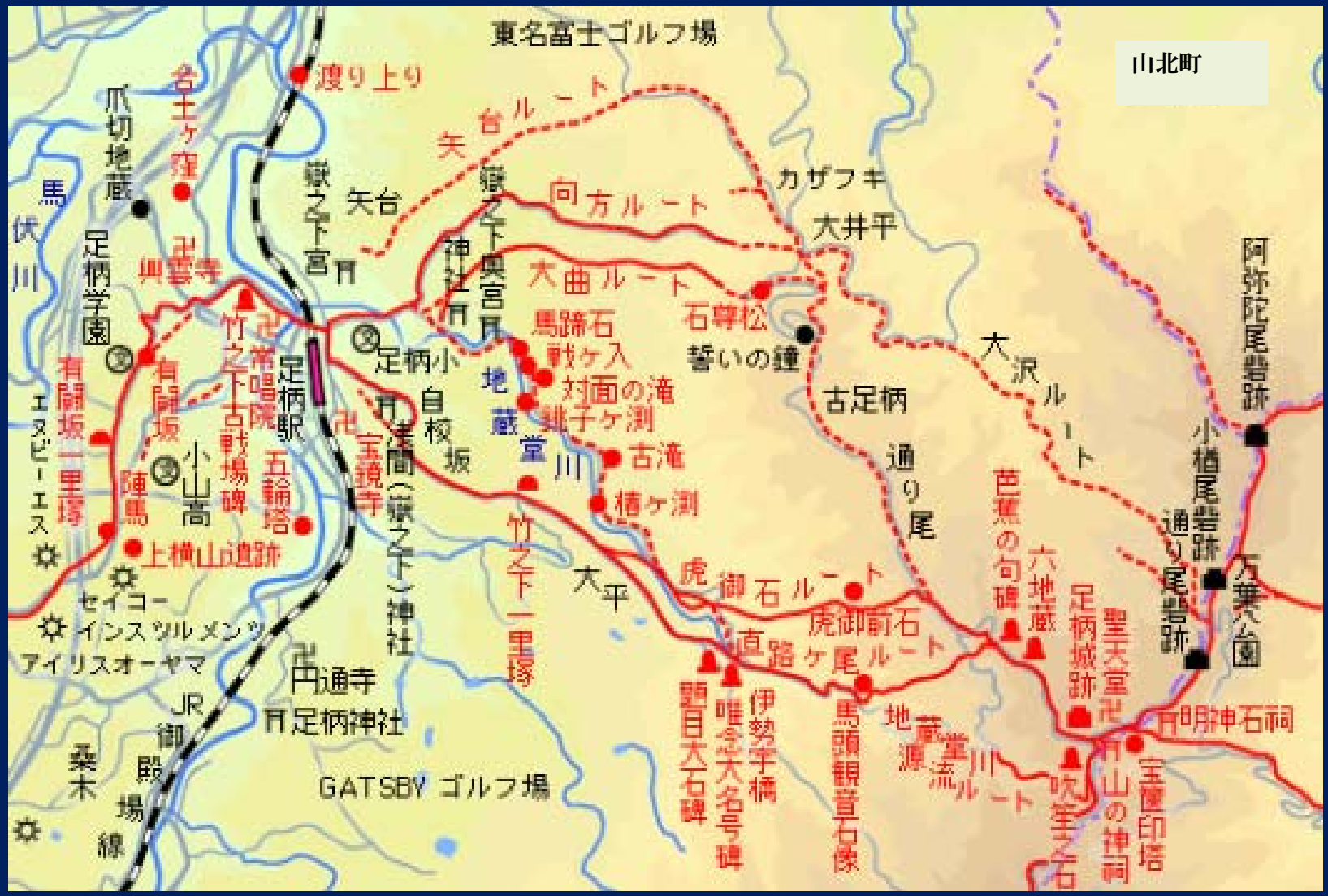
・寺院も多く、各家の信仰が多いことも特筆すべきで、姑から嫁へと受け継がれている。

竹之下の寺院　；　興雲寺・円通寺・宝鏡寺・常唱院

各家の信仰　；　日蓮さん22軒　お諏訪さん9軒
北斗さん3軒　大山講5軒　秋葉さん12軒

ハイキング・竹之下散策

・竹之下の魅力を満喫するハイキングコース、寺院めぐり、足柄古道ハイキング、滝めぐり、金時山、足柄峠へと、体力と時間を考慮してコースを決めてください。



山久荘　桜･蛍･湧水とわさび

・里山にたたずむ一軒宿。疲れを癒すのに最適な山久荘。

・春は桜・夏は蛍、秋は里山の紅葉、四季を通じてポコポコ湧き出る湧水で育つわさび。それらが全部揃っているのが山久荘。

夜桜の宴

蛍の飛翔

わさび田

皆様のお越しをお待ちしております

静岡おやま案内人　四季の旅人　一同